鎌倉時代における舌内入声音の諸相

佐々木　勇

目次

一、従来の研究と本稿の目的
二、入声字に対する入声点以外の加点
　1．妙一記念館本『仮名書き法華経』　2．三巻本『色葉字類抄』前田家本
　3．親鸞遺文　4．入声字に加点された非入声点の解釈
三、どのような場合に開音節化したか
　1．入声字への非入声点加点例が見られる資料　2．親鸞遺文における舌内入声字への緩声点加点例
　3．親鸞の声点加点資料
四、入声字の漢字表記と仮名表記
五、鎌倉時代における舌内入声音の諸相　――むすび――

一、従来の研究と本稿の目的

日本漢字音における入声音は、当初、各種の表記が見られることから、中国語原音どおり子音ｐｋｔで終わる発音を

するようにつとめられたことが知られる。しかし、開音節構造の日本語の中で、入声音も次第に開音節化し、今日に至っている。

その中、舌内入声（-t）については、室町時代末まで開音節化しなかったことが、諸資料によって説かれている。[1]

鎌倉時代においては、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（一九六五年九月）で、親鸞が舌内入声tのみ別形の声点を使用したことが解明され、舌内入声の閉促性が保持されていたことが明らかになった。

親鸞とキリシタン資料の表記をつなぐと、古来保たれてきた舌内入声tの音が、室町末から開音節化してきたということになる。

（前略〈キリシタン資料に開音節化例も見られることを述べる〉）これらの例から察すると、室町末期には、入声のtが開音節化してツ〔tsu〕になるきざしがあらわれていたのである。

（土井忠生・森田武『新訂国語史要説』（修文館、一九七五年）一〇一頁）

日本漢字音における舌内入声音の変化を右のように捉えるのが、現在の通説であると思われる。

しかし、仮名「チ・ツ」にあたる音が、あらゆる場合に閉音節で発音されたものかどうかは疑問であり、その旨が述べられてきた。その代表として、比較的早いものを左に引用する。

総じて、日本化した字音――呉音にせよ、漢音にせよ――を以て漢文を訓読することによってのみ、字音語は母語感情の険しい眼から逃れることが出来たのである。或は、漢文としては正しい字音が保存されてゐたが、語彙的に借用された場合はもはや日本化した発音（四声をも含めて）をされたものであらう。今日、日常の会話に援用される西欧語が、それを真の外国語として話したり読んだりする場合に比すれば、かなり気がるな取扱いをうけてゐることを考へ合せてみるとよいと思ふ。

（亀井孝「国語現象としての外国語の流入」〈「現代日本語の研究」一九四二年一〇月、後『亀井孝論文集5』に所収。引用

は、後者に依る。〉

漢字音としての入声音が、京畿地方の上流階級を中心に行われた事は、言うまでもないが、（以下略）。

（奥村三雄「古代の音韻」〈『講座国語史2　音韻史・文字史』一九七二年、大修館書店〉所収）。

これは常識的な見解である。舌内入声を閉音節で発音可能である者も、そのような発音が必要ない場合には開音節化させたであろうし、漢字音の学習が不十分で舌内入声を閉音節で発音できない層も存したであろう。(2)

しかし、「言うまでもない」とせず、これを立証することは困難である。ただ、近年、さまざまな種類の文献が紹介され、複製も刊行されて、かつてよりは条件がととのった。たとえば、従来の訓点資料と異なった面を見せる文献として、鎌倉時代中期写妙一記念館本『仮名書き法華経』が紹介された。(3) そして、この本に、「涌(平)出(平)品」（八三九3）と「出」に平声点が加点された例が存することに関して、次のような記述がある。

舌内入声字のみは、室町時代まで-tと開音節化しない形を保っていたというのが大方の見方であるが、（中略）位相差というような問題も含めて、なお議論の余地がある。

（沼本克明「妙一記念館本仮名書き法華経の漢語声調」注10（『妙一記念館本仮名書き法華経　研究篇』霊友会、一九九三年。後、『日本漢字音の歴史的研究』〈汲古書院、一九九七年〉所収。）

この問題に関しては、鎌倉時代の用例を加えることと、その例をもとに、その位相差の中身を明らかにすることとが課題として残されている。本稿は、この課題の究明を試みるものである。

二、入声字に対する入声点以外の加点

1．妙一記念館本『仮名書き法華経』

まず、右に引用した妙一記念館本『仮名書き法華経』を私に検索した結果を記す。

p入声　国(入)邑(平)（二〇八1）　雑(平)穢(平)（二四二5）　鳩(平)鴿(平濁)（二四二5）　来(去)入(平)（二五一5）　給(平)
与(平)（二五八2・九九一6）　出(入)入(平)（三三八2）　侍(入濁)立(平)（三〇三4）　執(平)持(上濁)（三一五3）　狭
(平)劣(入)（三四四3）　修(上)習(平)（八五三4）　等多数。(4)

k入声　迷(去)惑(平)（三二八2）　経(去)歴(平)（三四〇5）　善(平濁)国(平)（七六四2）　胸(平)臆(平)（七八六1）　相(平)
撲(去濁)（七九二2）　眷(平)属(平濁)（一〇五二2）　賈(平)客(上)(入)（一一六九1）
（蝮蝎・欲楽・財富への加点は、除外した。）

t入声　演(平)説(平濁)（七四三6）　涌(平)出(平)品(平)（八三九3）　不失(平)心(平)（九二一6）
（涅槃への加点は、除外した。）

2．三巻本『色葉字類抄』前田家本

鎌倉時代においては、他に、前田家本『色葉字類抄』の「抜(平)」が、指摘されている。(5)

そこで、前田家本『色葉字類抄』についても、全巻を検した。その結果、次の例が見られた。

p入声　引(平)摂(去濁)（上12ウ）　兜(去)納(平)（上57オ）　勅(入)答(平)（上69オ）　読(入)合(平濁)（上63オ）　泣(平)凍
(去)（上75オ）　急(上)速(入)（下61ウ）　救(上)急(上)（下62オ）　百(入)合(平濁)（下66オ）

k入声　羅(去)糶(入)（下23オ）　妯(平)(入)娌(上)（下28オ）　索(平濁)（下104ウ）

t入声　壹(平)團(平)橋(平)（上8オ）　抜(平)（上78オ）　臓(平)(去濁)物(平)(入)（下53オ）

3．親鸞遺文

親鸞筆『教行信証』においても、次の二例が報告されている[6]（所在表示を法蔵館複製本の頁数行数に改めた）。

塔(タウ)(平)寺(平濁)（六本―八五7）　猟(レウ)(平)師(上)（六本―九二3）

「塔」への声点加点例は、『教行信証』中に他に二例存する。

塔(平)（三―一七五5）　像(去濁)塔(平)（六末―七六2）

振り仮名も「タウ」と振られており、親鸞は平声字と認識していた可能性がある。

「猟」は、他に入声の加点例が存する（猟(入)師(上)（六本―一〇二8））。一方、振り仮名のみの加点例が二例存し、「レウ」とされている（三―一三五1・3）。

その他、次の例が見られる（朱声点・墨声点を区別した）。

p入声

〈墨声点〉

〔雑〕雑(平濁)行（六本―二八7）　疎(上)雑(平濁)（六本―二九2）

〔邑〕城邑(平)（六末―八1）　城邑(平)（六末―二六9）

〔立〕辯(平濁)立(平)（五―六一8）　造(去)立(平)（六末―八三2）

〔怯〕怯(平)弱(入清緩)（三―六六5）

〔劫〕劫(平清)（六本―七七1）

〔廿〕一千二百廿(上濁)八(入清急)（六末―八二3）

〔甲〕甲(平)寅(平)（六末―六五6）

〔輒〕輒(平)(去)然(上)(去)（三―六八6）

〈朱声点〉

〔雑〕雑(平濁)（二―九七6）

〔邑〕京(平)邑(朱)(平)（二―九七4）

〔怯〕怯(平)弱(入清急)（三―二五7）　疑(上濁)怯(平)退(平)心(去)（三―三一6）

〔劫〕億(入清急)劫(平清)（二―九五1）

〔接〕接(平)引(平)（二―九六5）

〔狭〕廣狭(平濁)對（二―一二六3）

〔急〕急(平軽)要(平)（二―八〇1）

k入声

〈墨声点〉

〔鑿〕鑿(平)竅(入清緩)（六末―七五8）

t入声

〈墨声点〉

〔一〕玄(平)虚(平軽)沖(去)一(去)（六末―七四3）

〔術〕九(上)仙(平)之術(平濁)（六末―七〇1）

〈朱声点〉

〔出〕出(平)(入清急)世(平)（三―四八5）

親鸞遺文中、漢字仮名交じり文では、『皇太子聖徳奉讃断簡』と『三帖和讃』に次の例が認められる。(7)

p入声〔塔〕寺(上濁)塔(平)（皇太子聖徳奉讃断簡一三3）

k入声〔極〕无(上)極(平濁)尊(上)（浄土和讃五四4）

4．入声字に加点された非入声点の解釈

右の三資料における入声字への他声点加点例は、多くの入声加点例に比してごくわずかなものである。よって、各資料を見る限りは、単純な誤写と考えることもできる。

しかし、その中で唇内入声の例が多いのは、「ふ」と表記した韻尾がハ行転呼を蒙ったからであり、[8]その結果、唇内入声がもっとも早く開音節化したことの反映であると考えられる。そうだとすれば、ともに見いだされた喉内・舌内入声字の非入声点もすべてが単純な誤りだとは言えないであろう。その背景にも、入声音の開音節化が存したのではないかと思われる。

右の三資料に非入声点が加点された舌内入声字は、「一・出・術・抜・劣・説・失・物」である。このうち、「一・出」は、複数の資料で非入声点が加点されている。これらは、規範からはずれるものではあるが、音声を反映した加点なのではないかと推測される。

三、どのような場合に開音節化したか

1．入声字への非入声点加点例が見られる資料

右の三資料のように、比較的多くの入声字非入声加点例が拾われる資料は、現在のところ管見に入っていない。[9]これらが、平仮名書きの法華経であり国語辞書であることが、韻書の規範からはずれた加点を生んだものであろう。その対極にあると考えられる同時代の法華経字音直読資料と漢和辞書（『類聚名義抄』）について、あらためて調査しても、入声字への非入声加点例は、存しない。[10]

仮名書き法華経と字音直読資料との中間に位置するのが、『教行信証』のような漢文を訓読した資料であろう。

右のような予測が可能であるが、鎌倉時代のすべての声点加点資料を見、入声字への加点を調査しなければ、確認できない。しかし、それは即座にできることではない。また、これまでの報告例から考えて、多くの収穫は期待できない。そこで、比較的多くの資料を残している一個人の声点加点を見て、考察を加えることにしたい。

その個人として、次の理由から、親鸞が選ばれる。

2．親鸞遺文における舌内入声字への緩声点加点例

親鸞は、入声点に「急（キフ）」「緩（ユル）」を区別した（濁急一・清急○・濁緩○̶・清緩○○）。「急（キフ）」声点は舌内入声音tと促音に、「緩（ユル）」声点は唇内p・喉内k入声音に用いている。[11]

この声点は、形によって、舌内と他の入声とを区別しているのであるから、舌内入声が他の入声と異なることを直接示すものである。また、急の声点は舌内入声とともに促音をも示しているから、急・緩の相違は、閉音節か開音節かの相違である。よって、この声点について調査することによって、どのような場合に舌内入声が開音節化したのかが知られることが期待される。

①字音直読資料

親鸞筆『阿弥陀経・観無量壽経註』には、「一（六例）・日（二例）・七（二例）・八」に緩声点が加点されている。[12]

また、親鸞の声点を移点したと考えられる龍谷大学蔵『無量壽経』では、「日・七・裂・鐵・徹・跌」に緩声点が加点されている。[13]

②漢文訓読資料

次に、親鸞筆『教行信証』における舌内入声字への緩声点加点例を掲げる（小林論文の挙例を含む）。

〈墨声点〉

〔一〕一(入清緩)百(入清緩)（六末—七九4）　一(入清緩)時(上濁)（四—二八5）　一(入清緩)異(平)（六本—一七2・六末—六〇6）
一(入清緩)（六本—五〇8）　第一(入清緩)（六本—七三5）　一(入清緩)日(入清緩)（六末—五九5）

〔佛〕世饒(去)王(上)佛(入清緩)（三—一七三7）　佛(入濁緩)言(上)（二—七九1）　化(平)佛(入濁緩)菩(上濁)薩(入清急)（四—二六5）　佛(入濁緩)（五—一九1）　佛(入濁緩)土(平濁)（五—七四6）　唯(去)佛(入濁緩)（六末—八四2）

〔日〕一(入清緩)日(入清緩)（六末—五九5）　王(平)日(入濁緩)休(平)（三—九九6）

〔述〕述(入濁緩)（六本—九〇3）　九(上)述(入濁緩)（六末—六〇6）

〔実〕実(入濁緩)（四—三六6）　権(去濁)実(入濁緩)（六本—三7）

〔出〕出(入清緩)没(入清急)（四—五〇7）

〔奪〕奪(入清緩)命（六末—一五2）

〔殺〕殺(入清緩)害(平濁)（三—一七六3）

〔決〕決(入清緩)定(平濁)（三—一六七7）

〔活〕邪(上濁)活(入清緩)（六本—九六1）

〔別〕別(入濁緩)傳(平濁)（六末—九三4）

〔術〕妙(平)術(入濁緩)（三—五4）

〔説〕領(平)説(入濁緩)（三—一五四6）

〔闥〕乾(去濁)闥(入濁緩)婆(上濁)（二—三二1）

〈朱声点〉

〔一〕一(入清緩)百(入清緩)（二—一〇二3）

〔佛〕阿弥陀佛(入濁緩)（二—四三3）　佛(入濁緩)名(去)（二—九七7）

〔別〕別(入濁緩)号(平濁)(二―四七8)　別(入濁緩)(二―一〇〇4)
〔述〕宣(平)―述(入濁緩)(二―七五2)
〔実〕実(入濁緩)(二―五一5)
〔忽〕忽(入軽清急)(入清緩)然(上濁)(去)(三―二九1)
〔劣〕劣(レチ)(入清緩)夫(二―一一六8)
〔逸〕放(ハウ)(平)逸(イチ)(入清緩)(三―六一5)
〔伐〕伐(ハチ)(朱)(入濁緩)(二―一二九4)

右は、入声点が加点されているものの、緩声点であり、開音節化していた可能性が高い。

以上の諸例を振り返るとき、複数例みられる舌内入声字が存し、複数の資料に亘って見られる漢字が存することに気づかれる。具体的には、「一・七・佛・日・出・別・術・述・実・劣・説」である。これらは、舌内入声字の中で、開音節化した発音が多くなされた漢字であるということになる。(14)

3. 親鸞の声点加点資料

ところで、親鸞(一一七三―一二六二)は、入声の急・緩を区別する加点をどの場合にも行ったわけではない。ここでは、その実態を見る(ある程度の言語量が存し、訓点が存するものに限る。声点は、親鸞自筆加点と考えられるものに限る)。

現在、親鸞真跡とされているものの中で、複製本で確認できる限りでは、入声の急・緩を区別するのは、1『阿弥陀経・観無量壽経註』と2『教行信証』のみである。この両本は、ともに加点年代の早いものであるが、『教行信証』と同時期の加点である13『涅槃経』17『唯信鈔(平仮名本)』は、声点加点も稀で、急・緩の区別は存しない。

入声の急・緩を区別する加点が存する両本には、『廣韻』反切の引用が存し、詳細な註の書き込みがある。声点加点資

	書名	声点加点	急・緩の別	本文の形式	声点加点年
1	阿弥陀経・観無量壽経註	○	あり	漢文(字音直読)	一二〇四～一二〇六
2	教行信証	○	あり	和化漢文・漢文(訓読)	一二三四～
3	三帖和讃	○	無	漢字片仮名交じり文	一二四八～一二五五
4	皇太子聖徳奉讃断簡	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五三
5	尊号真像銘文(略本)	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五五
6	唯信鈔(専修寺蔵本)	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五七か
7	唯信抄(西本願寺本)	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五七以前か
8	唯信鈔(東本願寺等蔵残巻)	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五七以前か
9	尊号真像銘文(広本)	○	無	漢字片仮名交じり文	一二五八
10	西方指南抄	○(稀)	無	漢字片仮名交じり文	一二五六・一二五七
11	浄土論註	○(稀)	無	漢文(訓読)	一二五六
12	大般涅槃経要文	○(稀)	無	漢文(訓読)	?
13	涅槃経	○(稀)	?	漢文(訓読)	一二三五頃
14	烏龍山師並屠児寶蔵傳	○(稀)	?	漢文(訓読)	一二五六頃
15	信微上人御釈	○(稀)	?	漢文(訓読)	?
16	浄土三経往生文類(略本)	○(一例・墨)	?	漢字片仮名交じり文・漢文(訓読)	一二五五
17	唯信鈔(平仮名本)	○(一例・墨)	?	漢字平仮名交じり文	一二三五
18	浄土五会念仏略法事儀讃	×	／	漢文(訓読)	一二三五頃
19	四十八願文断簡	×	／	和化漢文(訓読)	一二三四以前か
20	聖覚法印表白集	×	／	和化漢文(訓読)	一二三五頃

21	御念仏之間用意聖覚返事	×	／	一二三五頃
22	唯信鈔文意(正月十一日本)	×	／	和化漢文(訓読) 漢字片仮名交じり文 一二五七
23	唯信鈔文意(正月二十七日本)	×	／	漢字片仮名交じり文 一二五七
24	一念多念文意	×	／	漢字片仮名交じり文 一二五七
25	書簡	×	／	漢字平仮名交じり文 一二四二～一二六二

料の中でも、特に中国原音に配慮した専門的な文献であると言えるであろう。

ただし、この両本の加点にも差が見られる。それは、先に見た入声字への非入声加点例の有無である。『教行信証』については、先に当該例を掲げたとおりである。しかし、1『阿弥陀経・観無量壽経註』には、入声字への非入声加点例は無い。親鸞の声点を移点したと考えられる龍谷大学蔵『無量壽経』(声点は字音直読を示す)にも、該当例は無い。これら、浄土三部経と『教行信証』との加点の相違は、字音直読資料であるか訓読資料であるかの相違によるものと考えられる。

全巻に丁寧な声点加点が存するものの、急・緩の区別が無いのが、3～9の漢字片仮名交じり文献である。10・11にも声点加点が存する。しかし、同じく漢字片仮名交じり文献でも、22・23・24には声点が一切見られない。

22『唯信鈔文意』(専修寺蔵本正月十一日本)・23『唯信鈔文意』(専修寺蔵本正月二十七日本)・24『一念多念文意』は、それぞれ唯信鈔と一念多念分別事とを易しく注釈したものである。本文の漢字には丁寧に振り仮名が振られている。にもかかわらず、声点は加点されていない。

その『一念多念文意』の巻末には、親鸞の手によって、有名な次の言葉が書き込まれている(『唯信鈔文意』も同様)。

ヰナカノヒト、ノ・文字(モンシ)ノ・コ、ロモシラス・アサマシキ・愚癡(クチ)・キワマリナキ・ユヘニ・ヤスク・コ、ロエサセムトテ・オナシコトヲ・トリカヘシ〳〵・カキツケタリ・コ、ロアラムヒトハ・オカシク・オモフヘシ・アサケ

リヲ・ナスヘシ・シカレトモ・ヒトノ・ソシリヲ・カヘリミス・ヒトスチニ・オロカナル・ヒト〳〵ヲ・コヽロヘ・ヤスカラムトテ・シルセルナリ・

すなわち、これらは、1『阿弥陀経・観無量壽経註』・2『教行信証』の対極にあり、文字がよくわからない人々にも理解できるように書かれた著作である。これらには、入声点の急・緩の区別はもちろん、声点加点も存しない。(15)

この事実を本稿で問題としている舌内入声の発音と結びつけると、次のようになろう。

舌内入声の閉促性がもっともよく保たれていたのは、字音直読資料であり、ついで漢文訓読資料である。漢字仮名交じり文での発音は不明であるが、急・緩の区別を必要としないと親鸞が判断したことから考えて、漢文訓読資料よりも開音節化されることが多かったと推測される。さらに、声点加点がなされない「文意」の類は、より一層開音節化が進んでいたと考えられる。

四、入声字の漢字表記と仮名表記

右の推測に反するように見える例として、仮名文の舌内入声漢字表記がある。

小林芳規「平安時代の平仮名文の表記様式Ⅰ・Ⅱ――語の漢字表記を主として――」では、青谿書屋本土左日記で漢字表記されたものの一つに舌内入声音が有ることが指摘され、これは当時の国語と異なり、閉促性を持った音であることの反映であるとされた。

しかし、青谿書屋本土左日記における舌内入声の漢字表記例は「日記」のみであり、他に仮名表記例「せちみ（節忌）」が二例存する。よって、青谿書屋本土左日記においては、舌内入声が他の入声と異なっていたとは言えない。

また、高羽五郎「和名抄が漢語の語形を表記するのに用いた方法を中心として文字遣から平安時代の国語化した漢字音を探るいとぐち――漢字音考察の一――」（「金沢大学法文学部論集　文学篇6」一九五九年二月）によると、「倭名類聚抄」で

は、入声音はすべて仮名表記されており、舌内入声を含めて開音節化していたと考えられる。[16]

時代が降って、関戸本『三宝絵詞』一一二〇年写本の字音語の仮名表記において、舌内入声には他の入声と異なり、いわゆる零表記が見られることから、「和文の世界でも、舌内入声-tの発音が原音の閉促性を保っていた事を考えさせる。」という記述がある。[17] しかし、具体例は、「いさい（一切）・すけ（出家）・せさう（殺生）・ほさかい（菩薩戒）」などであり、促音が表記されなかったものとも考えられる。

一方、院政・鎌倉期の姿をある程度とどめるとされる「梁塵秘抄」の舌内入声字が、他の入声字と比較して漢字表記が多く仮名表記が少ないことが右の小林論文で指摘されている（具体例は「王朝文学」第四号）。これが舌内入声の閉促性を示すとされたのは、妥当な見解であろう。しかし、漢字表記された舌内入声字「佛・日・実・説・密・滅・瑟・達・跋・鉄」には、本稿で開音節化例を指摘した漢字が含まれる。よって、なお多くの資料の調査後に、考察を加えるべきであろうと思われる。

そこで、鎌倉時代の例を加えるべく、梅沢本『古本説話集』の入声音表記を調査してみた（ただし、目次・偈文はすべて漢字であるため除外した）。結果は、次の如くである。

p入声（複数例存する場合は、その数を（　）内に記す。仮名書きは、同定される語を漢字で（　）内に記す。以下同。）

〈漢字表記〉

法師（11）　作法　入道（10）　五十　十（3）　二十人（3）　十九（2）　三十（2）　廿九日（2）　四十九日　十こく（十石）　十ちやう（十町）　十足　十廿　十月　業集

〈仮名表記〉

ほうし（法師12）　ほう（法）　こをう（護法4）　こう（護法）　あほうきみ（安法君2）　すをう（修法）　ふかう（不合5）　かせう（迦葉2）　こう（甲）　さうしき（雑色）

k入声

〈漢字表記〉

三尺(3)　一尺(2)　尺九寸(2)　一二尺　二三尺　四尺　五尺　学生(2)　極楽(2)　京極殿　式部(9)　小式部　後朱雀院　六条(2)　丈六(2)　五六日　三百日　三百　十疋　百疋　さい木(材木)　大木　消息　百日(5)　二三百　二三百日　二三百人　百石　百こく(百石)　百丁　百疋　百両　禄(2)　まかた国(摩訶陀国2)

〈仮名表記〉

一さくよ(一尺余)　いんよく(淫欲)　かくもん(学問2)　きやくす(逆修)　とく(徳10)　くとく(功徳2)　とくにむ(徳人)　たいとこ(大徳)　けしき(気色10)　こくふてら(国分寺)　こくらくし(極楽寺3)　こしき(乞食)　しきふ(式部)　さうしき(雑色)　しきし(色紙)　しきたう(食堂)　しやく(笏)　すくろく(双六2)　せうそく(消息)　せうそこ(消息3)　せうとく(所得)　せんまむこく(千万石)　僧そく(僧俗)　そく(俗3)　たうそく(道俗)　たうとく(當得)　たいしやく(帝釈5)　しやうそく(装束2)　ちくせん(筑前)　ちこく(地獄2)　ちしき(知識)　ちよくし(勅使)　つくま(筑摩)　とうろく(藤六2)　はかせ(博士)　はく(薄)　はくのは、(伯母3)　はくの母(伯母2)　ひふくもん(美福門)　百こく(百石)　まかたこく(摩訶陀国)　みろく(弥勒4)　やく(役2)　やく(益)　ふく(服2)　ふくたい(福袋2)　ふく(福)　ふくち(福地)

t入声

〈漢字表記〉

一尺(2)　一条　一定　一二尺　一前　一の宮　一切　一さく(一尺)　一たん(一段)　一と(一斗4)　一斗(2)　一ひき(一疋)　後一条院(2)　一二日　七条　七星　七八年　百日(5)　二三日(5)　三七日(3)　日記　四五日(2)　七月十五日(2)　廿九日(2)　五六日　三日　三百日　四十九日　千日　二三百日　二千日　二月　九

月（3）　三月（2）　四月　五月　十月　念仏（3）　仏経（2）　仏師（5）　佛道　佛　大仏　仏堂　無仏世界　吉祥天　説教師　菩薩（2）　越前（2）　帥（2）　別当

〈仮名表記〉

いちせん（一善）　たいち（第一）　ねふつ（念仏）　ほさつ（菩薩6）　きちしやうてむ（吉祥天）　けちえん（結縁2）　すけ（出家2）　すち（術3）　そち（帥）　はち（鉢13）　ひちりき（篳篥3）　へちに（別）　ゑちせむ（越前3）　ゑちせん（越前2）　ゑちこ（越後）

右の通りである。舌内入声の漢字表記例は、他の入声と比較してやや多い。しかし、具体例は、「一・佛・七・日・八・月」という基本的な漢字が大部分を占めている。これらは、先の検討で、開音節化例が複数拾われたものであった。よって、舌内入声が閉音節であったため漢字表記されたと考えるよりは、常用される漢字であるが故に漢字表記されたと考える方が穏当なのではあるまいか。本資料では、同一語でも漢字・仮名の両表記が見られるものが有ることからも、本資料については、舌内入声の閉促性を積極的には言えない。[18]

五、鎌倉時代における舌内入声音の諸相　――むすび――

以上、字音直読の場と日常の場とを両極に、その中間に舌内入声が特定の漢字について開音節化した場合があることを見た。[19]

平安・鎌倉時代における音声の位相差の具体的な指摘として、脣内入声字の促音形とハ行転呼音形についてのものがある。[20]当該論文では、両形を漢文の世界と和文の世界（場合によっては、書記言語と口頭言語、学問語と日常語）との位相差として捉えている。そして、仮名書き法華経のような資料が、両者の接点であるとしている。

本稿で問題とした舌内入声字の開音節化も、これと同様に考えて良いのではないかと思われる。

すなわち、現代日本語の外国語音の実態から、すでに予測されていたとおり、中国原音に忠実にあるべき場では閉促性が保たれ、日常会話に近い場では開音節化されていたものであろう。

本稿の主資料を遺した親鸞は、書簡において、受取人の男女差・有識差によって漢語の使用量・漢語の表記法を変えていることが報告されている。[21] このような親鸞が、各種文献の字音注を、現実の発音を背景に書き分けることは充分考えられることである。

続く室町時代においても、左のごとく、位相差による舌内入声音の開音節化の程度差が指摘されていた。

キリシタン資料とほぼ同じ時期の言語を写したと考えられる原刊本『捷解新語』では、舌内入声-tを、巻十の候文ではハングル-ㄷで表すことがある。しかしこの箇所でも、-cu・-ccuのように開音節で示した例も少なくなく、巻十以外の日常会話文では-ㄷは皆無で、開音節表記のみであることが指摘されている。この事実から、当時の舌内入声音の実態を次のように推定している。

語末に立つ舌内入声韻尾が、二種の形［t］［tsu］で現れ、前者はより生の漢語層に、しかも、その使用する者の側から言えば、比較的教養程度の高い階級層、しかも、あらたまった場で用いられたものであり、後者はこれに対して、より国語化した語彙に、しかも比較的教養程度の低い一般庶民の側で、しかもくだけた言い方として用いられたのではないかと考えられる。

（浜田敦「語末の促音」「国語国文」二四巻一号、一九五五年一月）

鎌倉時代においても右のような状況が存したのではないかと考えられる。[22]

注

（1）小林芳規「平安時代の平仮名文の表記様式Ⅰ・Ⅱ――語の漢字表記を主として――」（「国語学」四四・四五集、一九六一年三月・六月）・土井忠生『吉利支丹文献考』（一九六三年）三一八頁・菅原範夫「室町時代の平仮名資料における一表記法――入声音・

促音表記を中心にして――」（「国文学攷」第六五号、一九七四年十一月）・同「大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相」（「高知大学学術研究報告　人文科学」第二八巻、一九八〇年三月）・同「中世文書に見る地域言語――「毛利家文書」元就・隆元・輝元文書を中心に――」（「国語国文」第六八巻第五号、一九九九年五月）・浅田健太朗「声明資料における「ずらし表記」の機能を巡って」（「訓点語と訓点資料」第一〇一輯、一九九八年九月）・木田章義「『補忘記』の入声」（「均社論叢」一〇、一九八一年一〇月）・岩淵悦太郎「謡曲の謡い方における入声ツについて」他『国語学論集』（一九七七年、筑摩書房）所収論文・金田一春彦「平曲の音声（上）・（下）」（「音声学会会報」99・101、一九五九年四月・十二月）・奥村三雄『平曲譜本の研究』（一九八一年、桜楓社）・福永静哉『浄土真宗伝承音の研究』（一九六三年、風間書房）、迫野虔徳『文献方言史研究』（一九九八年、清文堂）、等。

（2）大野透「入声音尾ツに関する新資料」（「国文学　言語と文芸」一巻四号、一九五九年五月）は、『山槐記』治承四年（一一八〇）四月廿二日の左記事に注目した。

奏曰、禮畢、其聲高長、レイヒツ、乍四字皆上聲也、又乍四字其間同長サニ唱之、宇治記云、ツ字鼻ニ言入テ後音平聲也、今如此歟

そして、「乍四字皆上声也、又乍四字其間同長サニ唱之」は開音節化したツであり、「ツ字鼻ニ言入テ後音平声也」は「特殊な、いはば学者的な発音であった」として、舌内入声音が「院政末期までは、固有日本語のツと同音に発音される方が普通であったと推定せられる」とされた。右の記事の解釈はさまざまであろうが、院政末期に舌内入声音の発音が一通りではなかったことは明らかである。

（3）霊友会複製本。以下引用では、この複製本の頁数と行数を示す。

（4）沼本克明「妙一記念館本仮名書き法華経の漢語声調」（『妙一記念館本仮名書き法華経　研究篇』霊友会、一九九三年）に挙例されているため、省略。

（5）高松政雄「前田家本色葉字類抄の声点について」（「岐阜大学国語国文学」第一五号、一九八二年三月）

（6）小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（「東洋大学大学院紀要」一九六五年九月）

（7）『親鸞聖人真蹟集成』に依る。朱声点は、複製本では判然としないものが多い。

(8) 妙一記念館本『仮名書き法華経』には、朽(入)邁(去)（下62オ）・松(平)容(平)(入)（下82ウ）の如く、本来唇内入声でない字にウ表記の共通性によって、入声点を加点した例も見られる。また、『教行信証』の挙例の内、「怯」「邑」は、本資料中の声点加点例の全例であり、親鸞が非入声字と認識していた可能性もある。

(9) 注4引用沼本論文注11、参照。

(10) 法華経字音直読資料は、竜門文庫蔵巻第一～第八鎌倉中期点（1-に-1-306）と大東急記念文庫蔵巻第七・第八鎌倉中期点（24-120-892）とを見た。後者には、「楽(平濁)習(平濁)苦(平)行(平濁)」（巻七205）の例が存するが、「習」の平声点は濁点であり存疑例である。

(11) 注6小林論文・沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」（「国文学攷」第六九号）・佐々木勇「親鸞筆『阿彌陀經』『観無量壽經』の漢字音について」（「比治山大学現代文化学部紀要」第一号、一九九四年）、参照。

(12) 具体例は、前注佐々木論文に示した。

(13) 佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽経』の訓点について――定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点――」（「鎌倉時代語研究」第十六輯、一九九三年五月）参照。

(14) これらの漢字が、開音節化していた可能性は、キリシタン資料の表記を引用して、小林論文でも述べられている。

(15) 唯信鈔文意・一念多念文意などは、意図的に丁寧に書かれていることが、注釈方法の点からも指摘されている（金子彰「親鸞の片仮名交り注釈書の文章表現法の特質」（「訓点語と訓点資料」第七十七輯、一九八七年三月）。

(16) なお、この「倭名類聚抄」の仮名表記が上代漢字音の表記と一致することから、日常漢語の場合は、古くから仮名の示す音で発音されていたのではないかとする指摘もある（沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）一二八頁）。

(17) 沼本克明『日本漢字音の歴史』一九二頁。

(18) 同一語の漢字・仮名両表記は、同一行に存することもある。また、いわゆる零表記も、促音化例と考えられる「すけ(出家)」のみである。

ここで、『梁塵秘抄』との相違がなぜ生じたのかを考えるべきであるが、即断は避けたい。ただ、本資料には、「こをう(護法)・こう(護法)・すち(術)・せうとく(所得)」などの例があって、漢字音が国語化していることがうかがわれる（高松政

雄「拗音仮名の一の場合――「せうとく（所得）」――」（「日本文芸研究」第四三巻第一号、一九九一年四月）参照）。

(19) ただし、字音直読の場でも、先行母音の相違によるチ・ツのかき分けが見られることから、舌内入声音節は完全な閉音節ではなく、音声としては寄生母音を伴ったであろうと推測されている（小松英雄『日本声調史論考』六九〇頁。林史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（「国語学」第一二二集）、柳田征司『室町時代語資料を通して見た日本語音韻史』（一九九三年、武蔵野書院）等）。親鸞の独特の舌内入声表記も、先行母音によってツとなる場合が決まることが知られている（吉沢義則「教行信証の訓点は坂東語か」〈「龍谷大学論叢」一九二三年四月〉）。

(20) 沼本克明「唇内入声字の変遷」（『日本漢字音の歴史的研究』所収〉）。

(21) 金子彰「親鸞聖人遺文の表記研究（一）」（「新潟大学教育学部長岡分校研究紀要」二五、一九八〇年三月）、同「親鸞聖人遺文の表記研究（二）」（「新潟大学教育学部附属長岡校園教育論究」二五、一九八五年三月）。

(22) 本稿の主対象とした親鸞と生活を共にした恵信尼は、他の同時代の字音直読資料と異なる表記を残している（佐々木勇他「恵信尼写『仮名書き無量寿経』翻訳並びに対照本文漢字索引稿」〈「鎌倉時代語研究」第十七輯〉参照）。

〈付記〉本稿は、「第二十七回広島国語談話会」（一九九九年七月一〇日）及び「平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会」（同年八月一二日）における口頭発表を元にしている。席上、室山敏昭・沼本克明・菅原範夫の各先生より、貴重なご助言を頂戴した。記して、感謝申し上げる。